



# ぐるりかけ

5.2003

亀鳴く

品川 鈴子

ひとむかし寡婦に甘んじ亀の鳴く

気が付けば伸ばす背筋へ青嵐

料亭に黄ばみ易きは天女花

京暮らし食はず嫌ひのさくらんぼ



さくらんぼ無用の長物ちようぶつならぬ柄よ

退院に何はなくともさくらんぼ

砂川の葉桜がくれ草津宿

筋違すじがひに飛脚駈けにし巢の燕

新茶の旗脇本陣にひるがへり

城の池縁どりに足る残花なり



# 玉 鈴

兵庫 齊藤由美子

花過ぎの子に後れたる女院陵  
やうやうに紫雲英田くれて比叡昏る  
塀 囲ひして尼寺の葱畑  
せせらぎを大原に聞く草の餅  
陽炎ひて草木染めの糸を干す

兵庫 坂口三保子

豊漁の鮎子岸ですぐ糶られ  
糶られたる鮎子運ぶ滴るを  
酒蔵の路地の日溜り寒雀  
薄氷を踏めば八方罅走る  
寒明けの地震の一揺れ飛び起きる

愛媛 鈴木てるみ

帝の贅職人の技春故宮  
春麗孔子の廟は小学校  
島々を巡れば蛇に違ひあり  
最南端波照間島の磯遊び  
台湾の岬の北風が巨船揺る

# 吟

香川 陶山 泰子

忘年会思わぬ人が泣き上戸  
年の暮くるくる回る三輪車  
行きずりの社で済ます初詣  
引退を告げる朝刊冬早  
俎の傷跡深し寒の水

愛媛 武司 琴子

抱擁を見て見ぬ振りの冬帽子  
駐在に泣き顔となる雪だるま  
厄落し教師の声のやはらかく  
まだ売れぬ屋敷五度目の花辛夷  
凍つる夜の眠れぬニュース機翼落つ

大阪 竹下 昭子

何気なき小さき倅せ鬼やらい  
戦争の噂しきりに鬼やらい  
園庭を狭しとはしやぐ四温かな  
鉄塔を写す水面へ春の釣り  
梅が香にゆかしき名前読み巡る

和歌山 田中嘉代子

竹串の岩魚逆立つ 囲炉裏端  
鉾杉の雪被て先が刃物めく  
雪霏霏といつもの道を医に通ふ  
靈山に早や頭を出せる 露の臺  
啓蟄に家出ず 吾は喪に籠る

兵庫 田中敏文

ラジコンカー操る子等の 枯公園  
神事終え 数多の火鉢 回廊に  
エンジン音 寒夜に響き 出漁す  
巨大タンカーしずしずと行く 春の海  
鮎子を炊く 匂ひよけ 露地まがる

兵庫 田中倫代

潮焼の顔を包みし 冬帽子  
教会のステンドグラス 春の色  
春寒し 一氣に走る 裁鋏  
セロファンに春の光の音のする  
桜鯛の予約して来し 瀬戸の旅

大阪 谷 泰子

手の肉刺を気にしてをれず 葎を刈る  
葎刈の軍手には血を滲ませて  
雪雲の奔る 彼方に 安土山  
葎倉の 静まり返る 雪催ひ  
雪雲の切れ間に 浮かぶ 遠伊吹

愛媛 筒井圭子朗

猟犬を連れ 連休の 遠出 猟  
まだ 熱き どんどの 灰を 畑に 撒く  
豆を 撒く 風邪で 閉鎖の 教室に  
豆を 撒く 打ちつ 放しの ゴルフ場  
笹子 鳴く 銅山 跡地の 碑の 裏で

兵庫 内藤 三男

曳売りの 一息 入れる 大冬木  
使者が 来て 綱取り 告げる 冬座敷  
パン屑に 鴨の 堅陳く づれたり  
北窓を 開き 隣家と 声交はす  
同姓とおもへど 遠き 鳴雪忌

# 薬草歳時記

(一〇八) 桑(クワ)

大音悦子

岐れ道いくつもありて桑の道

高浜 虚子

蚕が桑の葉だけを食べ、あれだけ立派な絹糸を作るのだから、桑の葉というのは余程凄いエネルギーを秘めた植物に違いないとかねがね考えていた。

秩父鉄道の車窓から見える桑畑は素晴らしい。桑畑は蚕のえさの桑の葉を採取するための畑であるから実はならないが、葉を採らなくなった成木は、初夏の頃にたわわに実をつける。濃い赤紫色の実をトドメと呼び、昔は子供達の格好のおやつになった。

桑は朝鮮半島、中国の原産で、日本には古い時代に渡来し、庭園樹、街路樹、養蚕用などに各地で広く植栽されている。落葉高木。植栽されるものは毎年刈り込まれるので低木だが、樹高は3〜7 m。10 mに達するものもある。花期は4〜5月。雌雄異株または同株で新枝下部に穂状花序を下垂し、淡緑色の小花をつける。

春から夏にかけて若芽や若葉を食用にする。よくゆでて水で

さらし、おひたしや和えもの、煮物などにするとよい。実は生食の他、ジャムにするとよい。又果実酒にすると美味しい。疲労回復や血圧降下の作用がある。

薬用部位は主に根皮(桑白皮)と葉(桑葉)で咳の薬として有名な五虎湯は麻杏甘石湯に桑白皮を加えたものである。桑葉は高熱が続いて狂乱状態の時に、気を下し陰を潤し内熱を去る目的で使う羚羊鈞藤湯の原料である。

## 桑白皮

効 能 汚肺平喘、利水、降圧

臨床応用 肺熱咳嗽、水腫、高血圧、糖尿病

性 味 苦甘寒、肺肝経に入る。

成 分  $\alpha$ 、 $\beta$ アミリン、プレニルフラボノイド等

## 桑葉

効 能 疎風清熱、清肝明目、血糖降下

臨床応用 風熱感冒、咳嗽、頭痛、めまい

性 味 苦甘寒、肺肝経に入る。

成 分  $\beta$ -シトステロール、タンニン、カロチン、

ペクチン、ビタミン、アミノ酸他

参考文献 「原色牧野和漢薬草大辞典」北隆館

「漢方医学大辞典」

雄渾社

「たべられる山野草12か月」主婦と生活社

「中薬大辞典」

小学館

著者略歴 神戸薬科大学卒 漢方薬局勤務・薬剤師

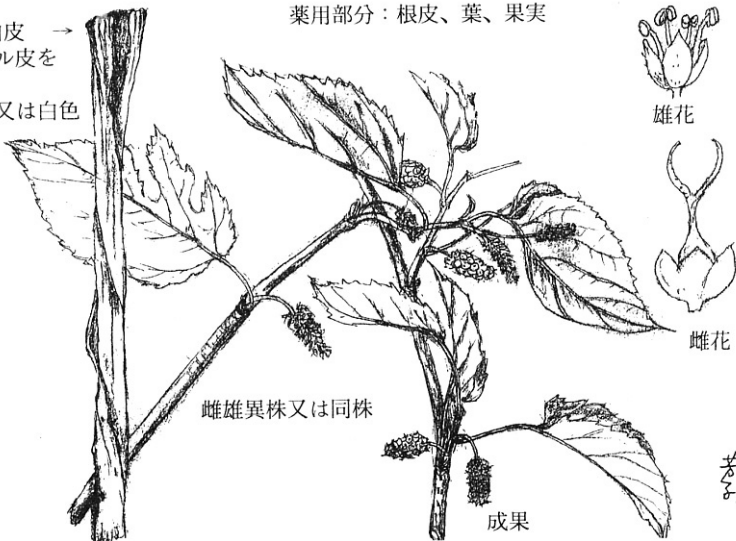
ヤマグワ [クワ属] (くわ科)

*Morus australis*

生薬：①桑白皮 →  
 { 根皮のコクル皮を  
 除いたもの  
 外面黄褐色又は白色  
 特異臭あり

薬用部分：根皮、葉、果実

中田  
 芳子  
 画



若木

桑の実の甘き赤さよ声弾む	夕映えの一村囲む桑若葉	桑の実や擦り傷絶えぬ膝小僧	桑の実に長きも長き峠かな	桑の実に顔染む女童にくからず	桑の芽や雪嶺のぞく峡の奥	小百姓桑も摘まずに病みにけり	富士晴れぬ桑つみ乙女舟で来しか
八木 紀子	桂 信子	上田 五千石	阿波野 青畝	飯田 蛇笏	水原秋 櫻子	村上 鬼城	河東碧 梧桐
くろつけ				芝 不器男			高野 素十

# 鈴の奏

品川鈴子選

見てよりはゴジもやはらぐ蜃気楼奈良 池上 栄子  
しら骨をゴジの導しるべに風疼く

狼煙台黄砂の野へと崩れ落つ

胡沙荒るる砂漠果てまで土饅頭

良く笑ふ菓舗の内儀や桜餅福井 木曾 鈴子  
雛酒に酔ひて昔の恋に泣く

ミサイルの飛び来る予測春愁

春キャベツややの衣脱がす手付もて

初午や寂れて久し造船所兵庫 馬越 幸子  
煤黒のピリケンにも神饌初午祭

角折れし二人となりて豆撒かず

結綿も櫛も納所に針祭

捨て犬の乳房重たき春夕愛媛 南 英子  
春潮を誘ひて動く一本釣り

春めきて傾げば動く古時計

ぶぎつちよな婆のお手玉山笑ふ

年金の目減りどうのと実千両兵庫 蓮尾みどり

よく育つこの樹雄株よ建国日  
チヨコレートとろりとのどへ寒明ける

鷹鳩と化していよいよはは介護

藁塚に凭れてをれば泣けてくる和歌山 伊藤 廸代  
半日は佛と遊ぶ庭枯れて

逆縁の子と目が合へり氷面鏡

白息に鏡の曇る七七忌

鳥避けのキューピーに寄る寒雀兵庫 小川 寿照  
老母はが編む毛糸たわしに手の温み

無人駅枯木に吊す案内板

海峡の巨船の狭間海苔を摘む

晚餐せに急せいて春着の裾捌き愛媛 足利 罇子  
日脚伸ぶ巨船ゆったり向きを変へ

上下左右揺れにまかせむ春船路

見わけなし南の島の春霞

寒紅で仕上げ顔師の銜え筆大阪 竹内 方乃  
寒水に菜の生き生きと甦へる



寒芝居仏倒しの仁左衛門  
大試験送り出す母手を合せ  
冬ぬくし「ドン」と言ふ名の汚れ犬

兵庫

堀井乃武子

住職の灰色コート月参り  
春昼を舐ひしままのタグボート

風光る「俳句は友」と禰宜の言ふ

締切りにゆとりもたせて初投句

愛媛

高橋 英子

着ぶくれてなほ愛らしき女の子

笠脱ぎてお札戴く初遍路

願ひ事控へ目にして初詣

十一面観音の御手水温む

東京

八代 嫺

露味噌や山に礼する村百戸

何かまだ話したき事春渚

道心の賜る暇や雪間草

メモ帳の言葉ちらかる寒の明け

東京

北川とも子

カーテンに白き朝日の寒の明け

内にある弱さ確かめ青き踏む

母となりし子の面ざしや古雛

不器用にかがる針金春隣

兵庫

中村 碧泉

編み棒の先が睡りを誘ひこみ

梅が枝にみくじ禁止の小短冊

わが庵の梅にも遅速退院す

通夜過ごす若き遺影に春燈はるあかり

兵庫

津田 霧笛

梅くぐり納骨堂へ石畳

割箸のタクトで春が動きだす

鉤かぎから長きおが屑春匂う

陶芸展織部の緑あたたか

埼玉

岡田 章子

「星の雫」と改名したき犬ふぐり

川鶉来て鴨の間を潜りゆく

並べ売る見事な露の臺の鉢

フィヨルドの狭き水路に滝ひびく

吾来れば鹿一斉に耳を立て

春蘭と同居しながら土筆立ち

平凡な日々この頃や山笑ふ

水仙に日の当たりぬて花鋏

甘きこと丹精したる法蓮草

酒呑みにココア勧める雨水かな

掛け声の大きくなりて畑返す

雪の宿古び主たる自在鉤

中村 和江

二階より咲く金縷梅坂の家

初蝶や職場復帰へ靴揃ふ

冬ぬくし家族の序列確まと犬

松木 清川

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句〜十五句 市橋章子 //

\* 選句は全て 品川鈴子

見てよりはゴジもやはらぐ蜃気楼 池上 栄子

ゴジ砂漠と呼ぶのは、モンゴル地方から天山南路へかけて砂礫のひろがる広大な一帯。主に石ころばかりがめだち、気の遠くなるほどの一本道が、遙かな地平線まで見渡せる。まことに荒涼たる眺めで、蜃気楼がしばしば顕れる。それを見ると三蔵法師などもここを通つたのだと、人心地にふと戻るやわらぎが感じられる。

良く笑ふ菓舗の内儀や桜餅 木曾 鈴子

老舗ながら気さくな奥様の、客あしらいの明るさに、桜餅もおいしそうに見え、売れ行きも良いのだろう。美しい笑顔に勝るサービスなし。

角折れし二人となりて豆撒かず 馬越 幸子

角隠しをして一緒になつた夫婦もながくなると、お互いに角突き合いも面倒だし、尖つていた角は、ちびて丸くなつたり或いは折れたり、気心を知り尽くした二人暮らしの家には、鬼も居るまい。

春潮を誘ひて動く一本釣り 南 英子

一本釣りは「潮を見做す」ことが肝要。瀬戸の海は一見穏やかだが、多島、内海故に潮流は複雑多岐にわたる。刻々と変わる潮を見極めて舟を動かす。それを「誘ひて動く」と見た。産卵の為、内海に魚の群れ来る春ならではの描写。名人の釣り。

鷹鳩と化していよいよは介護 蓮尾みどり

鷹が春のおだやかな気配に、鳩に姿を変えるとい

う、七十二候の一つ。三月十六日〜二十日頃。一家の要として気丈できりりとした母も、子に身をゆだねる、ひらがなのははになった。現実と向き合わねばならぬ子の心情はいかばかりか

藁塚に凭れてをれば泣けてくる

伊藤 廸代

たとえようもない大きな悲しみの中にいるのだろう。喪失感で胸ががいつばいなのか。じつとしていると、胸板の奥を、悲しみが音たてて流れてゆくのか。自然に涙がにじんできて、胸を打たれる。つらい。

老母<sup>は</sup>が編む毛糸<sup>は</sup>たわしに手の温み

小川 寿照

毛糸たわしは使いまわしの少しの毛糸で充分。洗剤要らずの省エネルギー、省資源。使い勝手もよい。作者の母上は九十才を越えておられるのではないだろうか。物を大切になさる優しい方でありましょう。一目一目丁寧に編まれたもの。勿体なくしておろそかには出来ない。

日脚伸び巨船ゆったり向きを変へ

足利 罇子

波止場を離れ、本航路へ進入するとき、船は大きく向きを変える。「ゆったり」がよい。景の拡がりを感じる。風も動く。心地好い佳句。春もすぐそこまで来ている。

寒紅で仕上げ顔師の銜え筆

竹内 方乃

華やぎと緊張感の往来する楽屋。熟練の手捌きで別の顔を造ってゆく。ざわめきの中の静寂の空間。決め手の紅をさし、仕上がり振りを確認する鋭い眼。日常から夢の世界への変身の段階。

春昼を舫ひしままのタグボート

堀井乃武子

タグボートは大型船の出入港の際、曳いたり押ししたりして助ける小型船をいう。自らの何倍も大きい船を動かす。連絡船や遊覧船は往来しているが、大型船の出入りは今日は無かったようだ。のんびりとおだやかな日の港の風景。